

子どもの遊び(その3)

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳

(二) 遊びと身体性

遊びを欲動的性質と関連づけて考える手立てとして、精神分析的な理解について簡潔に説明しておくのがよいだろう。ここではフロイトのいう現象面を中心に取り上げるために、理論形成のために提出された多くの点は割愛しなければならない。いずれにせよ粗描にとどめざるを得ないのだが^①。

フロイトによれば、遊びは幼児期的諸傾向の表現であって、欲動に結びついた情動性にその根源を発している



という。消化されない感情や、そこから引きだされてくる無意識のうちの空想的イメージが、遊びの中で活性化し、変形し、表出される。こうして充足がもたらされる。無意識層にある欲動的生活を一方の極とすると、もう一方には一般的(他者と共同の)現実におけるその許容可能性という極があり、この両極の間を遊びが折衷して、充足が可能になっている。この折衷性にこそ、フロイトが遊びの特徴として指摘した、両価性が内在しているのだ。両価性とはいわゆる二極性、つまり欲動の解除

と、その現実への適応という二極から成り立つ。想像的なイメージ像というのは快楽や攻撃性と連関しているものであるが、一般的現実からつくりだされたタブー（禁忌）に影響されて、意識化されることができない。諸イメージ像は、夢、空想的な生、遊びなどに變形しながら、別様のあり方で、いわば寛容なる象徴性の中で仮面をかぶりつつ、表出されてくるのである。

大抵これはイリュージョンの遊びの中で起こる。しかし、その他にも感覚や情動の意味がもっと直接的に―それだけでもっと隠微に遊び行為の中に暗示されながら―表現へともたらされるような遊びの位相もある^②。本節で主に扱う遊びは、運動的な世界ではなく、身体的な感受性を喚起するという点で、遊び的循環性運動（*前号参照）とはまた別のものである。ボールも（この位相の遊びにおいては）その運動性によって求められるのではなく、手を感じたり、触れたり、押し込んだり、つまんだりすることのできる、「スペース」した感じや「丸み」の帯び方に焦点があてられている。このいわゆる「感覚

受感的遊び」の位相について、これから論じていこう。

欲動的な現象は遊びと共に生じやすいものだが、この点の究明には、フロイト的視点からさらに説明していくと参考になるだろう。

フロイトは小児性欲について論ずる際、単に特殊の器性欲ばかりを指しているのではなく、なでたり、愛撫したり、触れたりして喚び覚まされる、身体の皮膚的な感じ方―感覚性―をも意味している。またこの感覚性は、性質を「見る」ことによっても引き起こされる。モノは、その性質によって子供を魅きつけ、じかにさわってみたい気にさせることができるのだ。身体が、そして手が、目で見えるものを感じたいと思うのである。

この身体的な接触要求が連関しているのは情動の領域であるが、フロイトの経験からするとこれは非常に広大なものだ。そして快楽のみならず、その対極的、すなわち攻撃性や不安などの嫌悪感もこの領域に属している。自己を保持し得るか、自我が明け渡されてしまうかは、これらの情動的欲求によって問題にされ続ける。

欲動的性質についてのフロイトの見解を、身体の意味に注意しながら補完し、現代の哲学的考察に適うものとした。こうした補足的作業は、フロイトが発見したものの意味を明確にするために必要である。身体はあらゆる印象や表現の基盤なのであり、この基盤としての身体から人間（あるいは子供）は世界の意味付けをし、意味を発掘するのだ。身体は、心的自我から切り離されな
い。それは身体的―心的自我、志向的な統一体なのである。身体的存在と共にあり、身体的存在から出発してこそ、世界の方から近づいてくる印象を子供は受け入れることができる。フロイトという欲動性と、現前される情動は、心的―身体的自我が周囲の世界に与えるセンス（意味）として理解されなければならない。

私たちの経験からすると、子供はまだ身体的な寄り添いや身体的接触への強い願望をもっている。なかでも親に寄り添おうとする願望は明白だ。フロイトによれば、そもそも性的欲動エネルギーを呼び覚ます愛情的対象

は、親だという。しかしその願望は、他の対象に移しかえられることができる。特に、モノの感覚的諸性質や身体的感受性などがその代理物として作用し得ることを、私たちの経験が示唆している。たとえば子供が眠りにつく前に、柔らかい布きれや、毛羽だったぬいぐるみなどをなでたり、身体にぎゅっと押しついたりするのがそうである。

しかし身体的願望の充足だけで、ましてやその充足感をただ味わっているだけでは、まだ遊びとはいえない。身体的接触を通して「遊ぶ」ためには、解放を求める欲動から、子供自身が自由になることが必須である。遊びが自然的欲動力のもつ一方通行性に陥ってしまうならば、それは遊びからの逸脱である。欲動という鎖から自分を解放してはじめて、活動的な自我が「遊び始める」と言い得るようになるのだ。

この種の遊びにアプローチしていく前に、まだ身体的情動性のもう一方の極に言及しておく必要がある。直接的な身体的接触を求める、快楽としての愛情と、憎悪

や攻撃性という情動とは隣接しあう関係にある。攻撃性というものは、身体的寄り添いを求める衝動に連結している愛情ほど、単純には理解され得ない。(西洋文化世界という) 共同世界で形成されたタブーは、攻撃性というものを排斥しようとしている。しかしプレイセラピー(遊戯的療法)という許容範囲の拡大された場においては、遊びの中で遊具のもつ性的な諸性質が、子供の愛着的関係を引きつけるように作用して、攻撃的諸傾向を現出させることがある。遊びの対象―プラスチック人形や動物のぬいぐるみなど―および、それに伴う遊びが、子供の求めている親の愛情を象徴的に表現していることがわかる。しかしこのような実践例が一般化されて説明されるということがあってはならない。親の愛情に不足しているからといって、必ずしもどの子も同じように遊ぶわけではないからだ。満たされていないという感情を持つていない子供でも、愛着のあるいは攻撃的な接触という、双方の快樂傾向を示す遊びに魅かれることがあり得るのだ。

今度はこの欲動的な傾向―つまり接触とその欲求充足への葛藤―がたしかに遊びに関係してはいても、主導権をとってはいないことを示そう。接触願望は強くなりすぎると、遊びへの志向性をたちまち喪失する。少年たちのすもう遊びで、欲動的傾向が過剰になった結果、遊び性を減少させてしまうことがある。すもうは、自我が身体的自我として取り込まれを遊びであり、たとえば愛着的行動が現れたり、攻撃的傾向に大きく傾いて、あまりに手荒な押し出し方をしたりした場合などに、身体的接近がゆきすぎになっているのは明らかだ。^⑤

ところで自然的欲動力が遊びの単なる周縁的領域にすぎないとする考えは、さらに他の現象にあつて検証されねばならない。そのために遊びの一形態―感覚受感的遊び^④―を観察していくことにしよう。子供の身体的感覚や身体的寄り添いを求める願望に対して、遊びの相手となる事物(遊具や材料など)が強力な影響を及ぼすのがこの遊びである。この事物は、いわゆる身体的感受性の世界を現前させつつ、ある魅力を發揮しているわけだが、

これが往々にして過剰にもなりやすい。⁶⁾

(三) 感覚受感的遊び

形態が失われ、輪郭や境界線が消えて、モノが身体的に感受し得るものとして現出してくると、接近願望と忌避願望という(互いに結びつき、引きつけ合うような)両価的感情を喚び覚ます、感覚的な世界のイメージが優勢になる。たとえば街を流れる運河(水路)の水さらい作業をするという時の、集まった野次馬の群れを観察したことがあるだろうか。大人も子供も、水の中からはたしてどんなふうに分をなさぬ大きな固まりが引き揚げられてくるかを、催眠術にかかったかのごとくにひきこまれて見入っている様子が思いあたるだろう。目で見える形態という表面性や、認識可能なイメージ像(視覚同様、嗅覚でも捕えることができる)の下に隠れて、身体性について一体どのような洞察不能な秘密が存在するか不思議に思うことだろう。⁶⁾ こういう世界と交わる遊びについては、世界の直観的印象が流されたり脅かされた

りしないように、自分固有の態度を保持する必要がある。何よりもこの遊びは能動的(アクティブ)な我を要請している。このことについて考えてみたいので、海岸におもむくことにしよう。そこにある水と砂が格好の遊び対象(材料)なのだ。水と砂はモノ的な形態性を欠いている点で、他の遊びに比べて特殊であり、私たちが観察したいような遊びへと誘う。一般的に、形態化されていない素材―粘土やペンキなども考えられるが―というと、直観的な触覚・感覚的性質が子供の関心をひきつけ、直接的で身体に寄り添うような関係を誘い出す。動物のぬいぐるみやつるのボールなどの遊具も、たしかに触覚・感覚的性質をもっているが、このようなものに比べて、非形態的な素材は感覚感感的遊びへのものと執拗な招待者である。海岸で子供が砂や水と遊ぶ時、私たちは何を見るのだろうか。

砂はいじられ、感じられ、押しやられ、引き寄せられる。手は乾いた砂を指のすき間からすべり落とし、なで、パタパタと砂の上を叩き、つかみ、溝を掘り、埋め

る。こういう遊びは水でも同様だ。水は運動性を伴って現れ、うねり、打ち寄せられ、水しぶきをあげる。くりかえしくりかえし波打ち際へはいつて行っては、逃げ戻ってくる。身が濡れる。だがあまり熱心になりすぎてはいけない。そうすると子供が遊びに面白味を感じなくなってしまうからだ。

この古典的ともいえる遊びの情景―老いも若きも遊び興じるわけだが！―は、浜辺におけるおきまりのものだ。泥んこ遊びと呼ばれることもある。子供が水をばちやばちはねとばし、泥をこねまわし、小石を水に投げ込むのを楽しんでいることを、親は知っている。子供は泥んこ遊びで素材に触れ、泥にたわむれつつ、汚なく泥んこになる。遊び相手（遊びの対象、素材）との間には距離が保たれていなければならないのだが、最大限接近しつुकしたいという傾向の前に抵抗できなくなると、遊びからその距離が失われてしまうこともあり得る。

プレイセラピーにおいて、こうした傾向の行き過ぎが非常に明確になることがある。その際、ある子供は砂や

粘土を混ぜ合わせた水の中に、手・腕をどんどん深く入られていこうとする。水遊びでは水を飲んだりすすったりする。しかしまたその同じ子供が、遊びの陥っている状況を、自分の身体の汚染や自分固有の態度の喪失として体験しているともわかる。そういう子供たちは「ばっちい、汚ないあ」と言って、忌避を示すのである。

対象との距離を喪失することは自我の喪失であり、心的―身体的自我として自分自身と遊びとを十分には統制することができなくなってしまう。不安による忌避や攻撃的な拒絶は、不安―快楽傾向にある両価的感情のバランスが失われ、欲動的な周縁現象の方が有力になったことを示唆するサインになる。

プレイセラピーの経験から、子供の遊び行動の意味に、より多くの洞察を得ることができる。甘やかされた子供―欲求の解放を制限する術を知らない―は、この種の遊びの中で自己保持をするのが困難だといわれる。逆に厳格に育てられる―汚なくすることが禁じられる―

と、遊びを生みだす自由が阻害されてしまうことがわかる。しかし自然欲動性がこの感覚受感的遊びに随伴する可能性があるからといって、子供が自力で（自然的欲動性からの）自由を見出し、自分の態度を保持できるのなら、プレイセラピーで子供をこういう遊びから遠ざけるべきではない。この遊びでは、感覚的印象に引きずられないようにアクティブな態度や立場をとりながら、子供は自身を欲動的傾向性から遠ざける。

私たちの新たな課題として、プレイセラピー以外の普通の日常生活において、子供がいかに自然的傾向に抗って遊びを生む自由を保持しているかを、さらに追求していく。親というのは、子供の身体的共存願望を最初に喚び覚すま人であるが、この親の意味が探求され続けねばならない。親は愛情の対象であるばかりではなく、タブーを現前化させる人物でもある。そのタブーとは社会的秩序であって、自我の存否を危機にさらすことのできる自然的傾向とは対照的に位置づけられるものだ。親は

いかにして子供に対し、遊ぶ必要性という自由を保障することができるのだろうか。

（四）遊ぶ条件としての安全性

遊びの位置づけと、遊びの自然的・文化的世界との関係について考察をすすめていく前に、親の意味についてもっとはっきりさせておかなければならない。親はたしかに子供の前に文化的世界を提示しはするが、かといってその自然拘束性を否定することはできないのである。

自然拘束性の端緒は、親子の愛情にあるのではなく、子供が存在をめぐって親が下す配慮の中にすでに早くから生じている。そこで親はどのように子供の遊ぶ自由を保障できるのだろうか。この自由を必要としているのは人間の子供だけではなく、動物の子供も同じことである。その点から、遊びを生み出す自由を可能なものにする、欲動連結性と保護についての洞察を得ることができよう。このことをまず例として話していきたい。バリーの説に従う。^①

本能的行動パターンによって動物がまだ自己防衛することができないでいる間、年長の動物が年少の動物の世話をひき受ける。この世話のシステムは、欲求充足によって自己保持を安全に行なおうとする目的性が必要とされる生命界において、解放を可能にする。この解放が、運動刺激の転換によって欲動的行動の直進性を変化させるのだ。⑧。だからこそ満腹時の動物は自分の餌食で遊ぶことができ、生の存続こそが諸行動の第一目的である生物学的領域に遊び行動が出現し得る。しかし遊びを生み出す自由を可能なものにするためには、自然的欲求——これには食欲もあてはまる——が充足されていなければならぬ。そして初めて二重的世界が可能になるのだ。つまり世界が二面性をもち、自然的存在に益するように、自然的諸傾向がかわるがわる現れて、対象から距離をおく自由を手に入れるのである。これによって獲物を戯れつかまえては手放すというような繰り返しができるようになる。

安全性と世話もまた子供が遊ぶための条件である。よ

く世話されている子供もまた、食べ物で遊ぶものだ。子供がヨーグルトをスプーンでかきまわし続けたり、角切りのサンドイッチを積み重ねて小さな塔を作っていたりすると、母親は、子供は大人より本能的なのだろうと考えて納得しようとする。しかしその塔作りの遊びでは、子供が単に満腹の動物の子供以上のものであることが観察される。なぜなら動物はそのようには遊ばないからだ。子供は自分を自然拘束性から解き放つ時、単なる遊ぶ自由以上のものを発見している。つまり形式付与への可能性や、形態でもって遊ぶ可能性をも発見するのである。ここに、本章の第二部（*本訳では第三章）で扱うある遊びの位相が垣間見えてくる。

だが親の意味についてまだ特筆されるべきことがある。親は遊ぶ自由のための条件だけを作り出しているのではない。親の子供との紐帯から、同一性もまた喚起されるのである。子供は自分を親と同一視し、遊ぶ自由を安全に確保することのできる手立てを親から継承する。

この継承・追従は、遊びが子育ての示す形式の単なる模

做以上のものとなる際の、創造的活動を可能にしなければならぬ。つまり遊びは、本能解除による継承以上のものであったわけである。

ここまできて本来のテーマにもどり、(子供の 未来的世界としての) 文化的世界が遊びに与える影響を跡づけていこう。

原註・参考文献(抄)

① 欲動的諸傾向は、フロイトが熟考の末に性欲と命名したものによって問題化する。これは―食欲とは違って―活動的生活を直接的に脅かすことなく、猶予されることができ。人間社会はしばしば延期を求め、快楽の自発的充足を大抵は許容しない。しかし性欲とは生の拡張にむかって全てを支配しているような衝動ではなく、猶予の可能は問題を生じさせるものなのである。生の更新を目ざすこの性欲の裏側には、保守的欲動が存在し、これは―反復衝動によって―生きる欲動に対抗し、静止あるいは消滅をもたらす。こうした欲動エネルギー説は仮説的であり、知覚可能な諸現象や情動性(特に快楽や攻撃となって現れる)の基礎的機動力を形成し、また前提としている。

② 遊びのセンス(イメーシあるいはゲシュタルト・イメーシ像)の暗示的特徴には、遊び的循環性運動という遊びの位相の中で出会った。ここで再び遊ぶことの前意識的、前反省的あり方に関与する。しかしフロイト派的な意味における、忘却や抑圧という無意識のことではない。

③ N. Boeis, *De grote jongen*, Utrecht 1954, p. 192. 「大きい少年」

④ Vermeer, *Spel en spel-paedagogische problemen* ノルムール「遊びと遊び教育学的問題」第五章参照

⑤ 原註(その1)―⑧参照

⑥ J. P. Sartre, *La Nausée*, Coll. *pourpre* 1938

⑦ G. Bally, *Vom Ursprung und von den Grenzen der Freiheit*, Basel 1945.

⑧ 第一章の遊びのダイナミクスと比較。

(お茶の水女子大学大学院)